

## 新しい学校生活における

# 保健体育のカリキュラムと教材の開発

—リモートの活用やソーシャルディスタンスを確保した実践から—

富岡 宏健・岩田 昌太郎・小木曾 航平・阿部 直紀・柿手 祝彦・松本 茂

**Abstract:** The school education system has been greatly restricted by the COVID-19 pandemic. We conducted a teaching program for teaching physical education skills in health and physical education based on the concepts of Distance Education (DE) and Remote Teaching (RT). In the case of applying DE concepts in a field hockey lesson, it was found that students were able to learn how to move without the ball. In the case of applying RT concepts, results were seen in the tasks that were worked on during the school holidays. In the teaching program, the students started to work on the use of ICT by utilizing the findings of DE and RT. It is necessary to further examine the nature of the subject curriculum that reflects these results.

### 1. はじめに

2020年早々に、新型コロナウイルス(COVID-19)感染症によるパンデミックという未曾有の状況に人類は直面した。その影響は、2021年に数回の感染症拡大の波を引き起こし、いまだ収束していない。さらに、2022年を迎えてもなお、新たな変異株の影響が懸念され、感染症とともに生きていく世界が続いていくことが予測される。

そのような中、日本の学校教育の現場では休校措置をはじめとする様々な感染症対策が取られ、「学校の新しい生活様式」(文部科学省, 2021)として定着しつつある。とりわけ、保健体育科のように学校のグラウンドや体育館、そして武道場やプールで、どのように衛生面へ配慮しつつ、児童・生徒の健康と体力を維持する授業をどのように実践していくのかが大きな課題となっている。しかも、感染症対策の一つとして他者と距離を確保すること(「ソーシャルディスタンス」)を念頭に置いた授業づくり(文部科学省, 2020b)が求められた。

他方、変革のもう一つの契機となったことが、2020年の学習指導要領改訂による全面実施が小学校から順次実施されたことも挙げられる。その改訂に伴い、体育の見方・考え方に「する・みる・支える・知る」(文部科学省, 2018)といった多様な関わり方が示され、より一層豊かなスポーツライフの形成が望まれる。とりわけ、授業で取り扱う内容については、「誰もが多様な形で関わることが可能なスポーツとは何かという観点」(岡出, 2020, p.19)で、これまでの体育授業を見直すことの必要性にも迫られているのである。つまり、これまで保健体育科の学習において行われてきた運動やスポーツについても新たな視点で捉え直したり、児童・生徒の実態や社会背景、学習内容に見合ったものを取り入れたりすることで、性別や年齢、障害の有無といった関係性にとらわれず、誰もが学習に取り組むことができるようになるのである。

これらに加え、GIGAスクール構想の実現に向けた環境整備による、児童・生徒への一人一台端末の導入も大きな変化をもたらしたと

---

Hirotake Tomioka Shotaro Iwata Kouhei Kogiso Naonori Abe Norihiko Kakite Shigeru Matumoto , Development of a Curriculum and Teaching Program for Health and Physical Education Using Remote Teaching and Ensuring Social Distancing -From the practice of using remote teaching and ensuring social distancing-

言えよう（文部科学省，2020c）。「これまでの我が国の教育実践と最先端のベストミックスを図ることにより，教師・児童生徒の力を最大限に引き出す」（文部科学省，2020c，p.3）ことを目的とされ，さらには COVID-19感染症の影響も相まって，急速にタブレット端末の導入が進んだ。これにより教育現場では，距離を確保した教育の充実と登校しなくとも学べる環境の整備が進んでいる。しかし，この教育効果を明らかにすることが喫緊の課題ともなっている。

このように大きな変化の中では悲観的になってしまいそうではあるが，この機会を，「次の一歩」にシフトチェンジする，重要な機会（松田，2020）と捉えることが肝要である。例えば，朝倉（2020）は，体育教師がこれまでの授業スタイルや考え方を見直す必要性を説いており，感染症対策や学習指導要領改訂，そしてタブレット端末を活用した実践といった，COVID-19感染症の影響を受ける以前の学習スタイルとを今後の学習スタイルをシフトチェンジしていくのである。その結果，コロナ禍を始めとする社会の変化の波に対して，受動的に変化させるのではなく能動的にシフトチェンジした結果は，必ず子どもたちの育ちへとつながっていくと考えられる。

## 2. 研究の目的・方法

### 2.1 研究の目的

そこで，本稿では，「遠隔教育（Distance Education；DEと略記）」と「遠隔指導（Remote Teaching；RTと略記）」<sup>註1</sup>といった視座から，保健体育科としてどのようなシフトチェンジが可能かを検討したい。これらを保健体育科において運用する際に必要となる考えを次の2点に整理した。

第1に，DEの第一歩として，保健体育科の教科の特性上，感染症対策のために学校環境の衛生面の整備に加えて，人的距離の確保を考慮した保健体育授業の運用をしなければならない。感染拡大を防ぐために物理的な距離をとることは「ソーシャルディスタンス」（例えば，大西，2020；梅澤ら，2021）と定義され，「人的接触距離の確保」（大西，2020）や「感染防止のための物理的な距離の確保」（梅澤ら，2021，p.20）を意味する。このような授業を実施するには，国や都道府県など

の学校設置者が設けている指針やガイドラインを参考にしつつ，学校の独自性を担保していかなければならない。とりわけ，「ソーシャルディスタンス体育（SD体育）」の領域（種目）はどうあるべきか，考えていかなければならない。したがって，従来の保健体育科の方針やカリキュラムを視座におき，新しいスポーツや種目にも着手していくことが求められよう。

第2に，新しい生活様式に準じたRTの充実である。まず，RTを考える条件として，オンラインをベースとしたものとそうでないものに分類する。本研究においては，オンラインをベースとしたものを中心にRTによる授業ととらえ，学校のICT環境の状況に応じてその方法を模索する必要があると考えている。

以上の2点を視座に置きつつ，これからの保健体育科のカリキュラムをどうあるべきかを検討しなければならない。そこで，本稿では，DEとして実践したSD体育の授業とRTとして実施したオンラインを活用した取組をもとに，「学校の新しい生活様式」での保健体育科の教材やカリキュラムの在り方について検証することを目的とした。

### 2.2 研究の方法

研究の方法として，DEとしてのSD体育については，生徒の授業後の感想をもとにKJ法（川喜田，1967）で分析をし，その効果を検証する。RTとしてのオンラインを活用した取組については，具体的事例をもとにその成果を検証する。そして，研究全体の成果を分析する手段として，各附属学校（翠，東雲，三原，福山）が共通して取り組む教育実習を分析対象とする。体育教師は体育教師教育者でもある（岩田，2020）。教師の側面とともに，教師教育者としての役割や研究者としての役割を担っている附属学校教員は，このDEやRTの実践における成果と課題を踏まえて，教育実習にもその成果を反映させているとも考えられる。さらに，DEやRTの細かな実践について，各附属学校で取り組む内容やその背景にある環境（社会背景や学校文化など）が異なるため，厳密に分析しづらい環境にある。そのため，附属学校の使命の一つでもある教育実習を取り上げることで，取組の共通項を探ることとした。その際には，SWOT分析（朴，2017）

を用いて、成果と課題を明らかにすることにした。

### 2.3 研究の実際

まず、研究の準備として、オンライン・ミーティングを実施し、それぞれの附属学校での取組を整理した「ガイドライン」を作成した。その中で、保健体育科だからこそ注意しなければならない、更衣室の問題や熱中症への対策などを共通理解として実践できるようにした（表1）。

表1 具体的取組としての対策

	手洗い場所	更衣場所
男子奇数	理科室	更衣室A（ロッカー指定）
男子偶数	3階手洗い場・4階の手洗い場・美術室	教室（自分の席）
女子奇数	3階手洗い場・4階の手洗い場・美術室	女子更衣室（ロッカー指定）
女子偶数	1階手洗い場	体育館（場所指定）

さらに、カリキュラムを編成する上で、タブレット端末の導入に当たっては、これまでの教育実践を明らかにすることや感染症の流行状況を抜きに考えることは難しい。そのため、これまでの教育実践を「Before コロナ」、感染症対策を実施している期間を「With コロナ」、終息後の実践を「After コロナ」<sup>※2</sup>と位置付け、整理した。

そして、With コロナの期間における実践として、DEとRTを行った。DEの授業実践については、中学校3年生（80名）を対象とした。授業内容は、活動内容に感染症による制限の多い球技ゴール型とし、取り上げたスポーツは、ホッケーを選択した。ホッケーは、学習指導要領に記載されていないスポーツであるため、球技ゴール型でよく示されるサッカーやハンドボール等に接続することも考慮した（グリフィンら、1996）。その接続をつなぐものとして、ボールを持たない時の動きの習得に焦点化して実践を行い、生徒の感想をKJ法（川喜田、1967）で分類した。

表2 DEとしてのホッケー単元の概要

1時間目	2時間目	3・4時間目	5・6時間目	7時間目	8・9時間目	10-12時間目
試しのゲーム	ボールに慣れる（1vs1）	攻撃に特化して動く（2vs1）（3vs2）	パスに特化して練習する（2vs1 や 3vs2：ドリブル禁止）	守りを考えた動きをする（2vs2）	チーム課題に応じた練習を行う	学習したことを生かした、ゲーム大会
	ミニゲーム	ミニゲーム	ミニゲーム	ミニゲーム	ミニゲーム	

#### 感染症対策として実施をしたこと

人的接触距離の確保についての注意喚起	少人数での活動にすることで、休憩時間を確保	試合の中で行われていることを、場面を切り取って少人数での練習に置き換えることで、学習場面の確保と運動量を上げすぎないように配慮	チーム別練習時に密となる状況を避けるように配慮	マスク着用時の運動量が激しくならないように配慮 コート間を広く取り、人的接触距離を確保
ミニゲーム時のコート間を広く取り、人的接触距離を確保				

#### ボールを持たない動きに関する学習の工夫

ボールを持たないプレーヤーがどう動いているかという点から課題を発見させた。	ボール奪取時にどのような方向から向かえばよいかを考えさせた。	練習時のゴールを2ゴール設定することにより、どちらを攻めた（守った）方がいいのか、という点について考えさせ、ボールを持たない時にも常に動くことが出来るようにした。	試合に向けて、点を取ることや勝敗ではなく、学習の成果として、ボールを持たない時にもチームの中で役割を発揮できるかという点で生徒に成果を判断させた。
---------------------------------------	--------------------------------	---	---

RT 授業実践については、中学校2年生（60名）を対象とした。授業内容は、体づくり運動を取り上げ、2020年4月から5月末までの休校期間中に実施をした、オンラインベースの学習である。

カリキュラム編成の効果として、教育実習を基にした効果測定は、附属学校の4校（翠，東雲，三原，福山）で教育実習を担当した保健体育科の主任に対して Google form を活用したアンケート調査を行い、その結果を SWOT 分析（朴，2017）によって検証した。

これらの分析に対して、被験者となる生徒には、研究への参加は、成績等に影響することはないことを説明している。また、質的研究における研究の妥当性と信頼性の担保の観点（メリアム，2004）から、複数の調査者による検証を行い、調査結果の現実的妥当性について協議を行った。なお、分析にあたっては、授業者以外の大学教員と附属学校教員で担当した。

### 3. 成果と課題

#### (1) DE の授業分析による成果と課題

まず、DE の授業実践についての分析である。表2は、DE として実践したホッケーの単元の概要を示している。

この実践は、感染症対策を主軸に据えた単元であるため、表2に示すような対策を講じて実施をした。そして教材のもととなった運動は、現在ネオホッケーとして名付けられている、ユニバーサルスポーツとしてのホッケーのルールを採用した（日本フロアボール連盟，2012）。有山ら（2009）や鈴木（1996）などが示すように、ネオホッケーとしての学習効果も求められる。その一方で、学習指導要領の中で、球技ゴール型として例示されるサッカーやハンドボールとの接続性も考慮した。そのため、本単元はボールを持たない時の動きを中心に学習を進め、その内容を表2に示した。

授業後の生徒の感想を KJ 法で分類した結果、メインカテゴリーとしては、「授業を通じた技能の習得と向上について」「授業を通じた思考や気づきについて」「チームや仲間への意識と関わり方について」「自己の取り組み方の変容と成長の実感について」という4つのカテゴリーに分類できた。さらにその下位構造として、サブカテゴリーに示したような分類に

区別した（表3）。

表3 KJ法による分類による  
メインカテゴリーとサブカテゴリー

メインカテゴリー	サブカテゴリー
授業を通じた技能の習得と向上について（52.2%）	ホッケーの技能の向上（37.1%）
	状況に応じて動く技能の習得（11.7%）
	スペースを活用する技能の習得（2.4%）
	仲間への声掛けに関する質の向上（1.0%）
授業を通じた思考や気づきについて（28.3%）	プレイや動きに関する思考（16.1%）
	ホッケー実践を通しての思考（12.2%）
自己の取り組み方の変容と成長の実感について（10.2%）	積極的な動きの実践（4.8%）
	仲間への声掛けの実践（2.4%）
	自己の成長の実感（2.0%）
	安全なプレイの実践（1.0%）
チームや仲間への意識と関わり方について（9.3%）	チームワークの高まり（3.5%）
	チームに対する意識の向上と変容（3.4%）
	他者からの学びと他者承認（2.4%）

分析の結果から、「プレイや動きに関する思考」や「状況判断能力」など思考力・判断力が向上したと推察される。岩田（2016）は、球技学習の面白さを「『判断（意思決定）』行為に積極的に参加できること」（p.3）であると指摘している。ホッケー型球技においても、生徒は学習意欲を高め、積極的に学習に取り組んだ結果、状況判断能力に代表されるような技能の育成につながったと考えられる。生徒はボールを持っていない時に「どう動くか」ということについて、考えながら活動していた。ここで言う「判断（意思決定）」は、学習指導要領上の「思考・判断・表現」とは一線を画し、どちらかという、技能に近いものである。すなわち、生徒は、球技ゴール型の学習として、技能を獲得することができ、その面白さを感じ取っていることから、学習として成立すると推察できる。

また、ソーシャルディスタンスの確保として、スティックを用いたスポーツを取り入れた結果、身体的接触がなくなり、積極的に運動にも取り組めるようになり、主体的に学習に取り組む態度の向上にもつながったと考えられる。さらに、サッカーに関連する知識に言及する生徒の感想もあり、種目間の「越境」(森, 2019)や学習の「転移」(グリフィンら, 1999)と判断できる学習効果も見出すことができる。

一方で、他の領域や種目とのつながりの可能性を考えることができるが、そのことが行動、つまりは動きとして表出しているかどうかという点については検証が不十分であると言える。今後、継続的に実践研究を蓄積する中で、理解と動きのつながりといった視点からも分析を行っていく必要がある。今後の課題として、引き続き検証を行っていききたい。

## (2) RTの授業分析による成果と課題

2020年3月初旬から5月末にかけて、新型コロナウイルス感染拡大を防ぐために全国で学校の臨時休校措置がとられた。それまでは週2～3回、約1時間ずつの体育授業によって生徒の運動機会は確保されていた。しかし、生徒と教師、また生徒同士で直接関わるができない中でその活動を保障することは極めて困難なことであると考えられた。保健体育の学習の根幹には「身体性」がある。つまり、身体を動かすことによって学習できるのであって、それを遂行するためには活動環境(活動場所)が必要となる。また、仲間同士で関わることによってその学習がより促されるという側面もある。それらの場所や機会が保障できない状況下で、保健体育科の学習を豊かなスポーツライフにどのように結びつけるか、現場レベルでの工夫が求められた。この臨時休校措置の間に、文部科学省からも臨時休業中の学習保障について示された(文部科学省, 2020)。その通達には、学習指導に関してICTを最大限に活用して遠隔で行うことが効果的であると示された。さらに、保健体育に関わるることについて、運動取組カードと屋外で行える運動の例、そして屋外でのいろいろな運動の組合せの例について小学生と中高生に分けて例示を示している。以上の内容についても臨時休校中における保健体育学習の充実に向

けた指針として、現場の教師にも大いに参考となったと思われる。そこで、この臨時休校中における保健体育学習を遠隔指導(RT)の学習プログラムの実践で試みたことについて事例的に示していくこととする。

感染拡大を抑止するための臨時休校なので、運動を行う際には1人または少人数で三密を避けて行うという前提を踏まえた学習プログラムの設定が求められた。文部科学省(2020)によると、なるべく屋外で毎日30分から60分程度、例を参考にしていろいろな運動を組み合わせで行うこととして例示をしている。したがって、今回は中学2年生を対象として、体づくり運動の単元としてRTの実践を行うこととした。中学校の体づくり運動領域では、より具体的なねらいをもった運動を行い、学校の教育活動全体や実生活で生かすことが求められるとされている(文部科学省, 2017)。したがって、これらの事柄を踏まえて学習プログラムを設定することとした。

具体的には休校中に自分が行った運動の記録をつけるという課題を設定した(図1)。主に運動を行った日、運動の内容、運動強度、運動時間をなるべく簡易的に記録できるようにした。さらに、実施した運動にはどのような効果があったかについて記述できるような項目も立てた。これらの内容の記録用紙を休校前に生徒へ配付し、休校明けに提出するように促した。一方で同じ内容の記録用紙をGoogle formを使用して作成し、Google classroomを活用して生徒に配信することとして、こちらの電子媒体での提出でもよいこととした。このような取り組みによって、生徒はスマートフォンやタブレットなどからも運動の記録が

### 【記入例】

4月11日 土曜日		座った(寝た)状態で30秒間の脈拍を計測し、2倍した数値を記入する。
安静時心拍数 ( ) 拍		
運動内容	あてはまるものにすべてに○をする。	
① ストレッチ	② ウォーキング	
③ ランニング	④ サイクリング	
⑤ 筋力トレーニング	⑥ ダンス(エアロビクス)	
⑦ その他( 鉄棒運動 )		
運動強度 ( 14 )	運動時間 ( 55 ) 分	
運動の効果	6~20の数字を選択(表を参考に) 合計運動時間を分単位で記入する。	
走っている時に呼吸の苦しさはそれほど感じなかった。足(特に太もものあたり)に疲労を感じた。たくさん汗が出たが、運動後は爽快でとても気分がよくなった。		

図1 休校中の運動記録課題(記入例)

できるようになり、運動意欲を高める一助となったと考えられる。

電子媒体で記録をさせることで、全員ではなく一部の生徒にはなるが実際に運動を実施している状況を休講期間中でも把握することができた。そして、そのデータをまとめて生徒へフィードバックすることが可能であった。そこで、休校期間の前半（2020年4月上旬～5月上旬）に電子媒体で提出された記録を簡易的にまとめ、運動時間や運動強度、運動内容について Google classroom を通して生徒へフィードバックを行った。中でも、運動内容についての共有はさらなる生徒への運動意欲の喚起につながるのではないかと考えられる。特に、その他の項目に示されている内容は生徒の運動実施に対しての工夫を見て取ることができた（図2）。そして、生徒の運動の捉え方は様々であることがわかり、共有することの意味が大きいことが感じられた。

休校期間後半（2020年5月上旬～下旬）では、これまでの運動実施の課題と合わせて新たな課題を設定した。課題の内容は、自分が実施した運動内容についてレポートを作成することである。こちらは Google classroom を通して

多く示されていた内容	
縄跳び	バレーボール
サッカー（リフティングなど）	テニス
野球（キャッチボール、素振り）	バランスボール

  

興味深い内容	
ラジオ体操	階段登り降り（マンション）
トランポリン	農作業

図2 運動内容「その他」まとめ

【記入例】

運動内容	1 ストレッチ	2 散歩（ウォーキング）	3 ランニング
	4 サイクリング	5 筋力トレーニング	6 ダンス（エアロビクス）
	7 その他（ ）		
運動内容の説明	ややきついペースで1分間、非常に楽なペース（ジョギング）で1分間を繰り返し10回行う。 文章での説明が難しい場合は、図などで示してくれて構いません。		
運動強度	【軽い】	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5	【きつい】
運動の効果	1 リラックス	2 身体を柔らかくする	3 素早く器用に動く
	4 パワー(筋力)アップ	5 スタミナ(持久力)アップ	
	6 その他（ ）		

図3 休校中の運動内容レポート課題（記入例）

の配信のみで生徒に課題提示をして、提出も任意とした。自分で運動内容の項目を選択し、その項目についての具体的な説明をレポートさせた。さらに、実践してみて自らが感じた運動強度のレベルと運動の効果を選択する項目で示させた（図3）。運動内容の説明を文章によって示すことの難しさはあったと思われる。しかし、提出したせいとは詳細な内容を記述していた。

休校明けの6月上旬に提出されたレポートをもとに運動内容を教師側で精選してまとめ、体づくり運動の単元で実践を行った（図4, 5）。そして、単元のまとめとして自分の運動課題とその課題に基づいた運動プログラム、さらに運動の必要性について感じたことなどをレポートにまとめさせた。特に、運動の必要性についての記述では、「運動をしていたら血行が良くなると感じた。」、「ストレス発散にやはり一番効果がよく、体にも良い。」といった記述が見られた。さらに、「久しぶりに運動を

No.1

運動内容	ストレッチ	
運動内容の説明	①床座になり、足を揃えて前屈をする。(20秒くらい) ②足を開き、左右、前に体を倒す。(20秒くらい) ③両足の裏をつけたまま、かかとを体の方に寄せ、膝を下に下げる。 ④背中を手を組んで後ろにぐ〜と伸ばす。前と上も同じように。 ⑤肩の関節が柔らかくなるように、両手でタオルを持って後ろに回す。	
運動強度レベル	運動効果	

No.2

運動内容	筋力トレーニング	
運動内容の説明	①脚向けの状態になる。まず、右足のつま先の上に左足のかかとを乗せる。次に、左足の位置は固定したまま、左足のつま先の上に右足のかかとを乗せる。(この時、足は宙に浮いている)これを5回繰り返すと体が、ちょうど90度の形になる。そのあとは、今さっきの動作の反対で、右足のかかとに左足のつま先をつける。これを5回繰り返すと、元の脚向けの状態に戻る。 ②うつ伏せに寝っ転がる。腕を肩幅ほど広げて、上半身を高く起こす。つま先を立てて、下半身を浮かせ、前腕とつま先で体を支えるフォームにする。足首から肩まで一直線にして30秒キープする。 ③V字バランスの状態でおなかをひねる(100回)。V字バランスの状態で膝を上げて腕に太ももを引き寄せるような感じ(70回)。 ④脚向けで足の角度が90度になるよう足を立たせ、お尻を上げ、下ろす筋トレ…両足つけたまま、右足、左足を各10回ずつ×3セット	
運動強度レベル	4	運動効果
		パワー(筋力)アップ

図5 運動内容レポート②（一部抜粋）

すると運動能力が落ちていたから、定期的に少しでも運動しないといけないと思った。」という記述もあり、運動は心身両面に効

果があることと、それを継続して行うことに意味があることについての認識が深まったことが見てとれた。

以上のように、休校中の RT による実践から、休校明けの対面による授業実践へとつなげる体づくり運動の単元を行った。少なくとも運動の効果や必要性についての認識が深まり、体づくり運動の目標にも掲げられている“実生活で生かす”ためのきっかけは提供できたと考えられる。

### (3) 教育実習から分析する各学校の取組

先述のような DE や RT に取り組む中で、各附属学校においては、ガイドラインを適宜修正するとともに、カリキュラム・マネジメントを実施しながら保健体育の実践に取り組ん

できた。そのような中で、附属学校の使命の一つでもある教育実習の受け入れについても、連携を図りながら取り組んできた。教育実習は各学校の受け入れ規模が様々であり、また教育環境も異なるため一律での指導とはいかなかった。しかし、それぞれの取り組んできたことと、今後への課題について SWOT 分析で検証した。

SWOT 分析とは、マーケティング戦略を内的要因と外的要因に分けて分析する方法であり、その結果を表に「強み (Strong)」、「弱み (Weakness)」、「機会 (Opportunity)」、「脅威 (Threat)」にマトリクス上に整理したものである (朴, 2017)。

「強み (Strong)」として挙げられるのが、変化の大きかったこの2年間 (2020~2021年)

表4 教育実習に関する SWOT 分析

2年間の教育実習で、取り組んだ重点的な内容を教えてください。 <b>「強み (Strong)」</b>	2年間の教育実習で、取り組めなかった教育実習の個人的課題を教えてください。 <b>「弱み (Weakness)」</b>
これまでと大きくは変えなかった。本質は生徒への熱量として考え、感染症対策もその想いのひとつとして指導した。	特になし。
対面による授業実習の充実。	特になし。
授業づくりに特化して教育実習を行った。理想の授業を定義し、100点化した。実習生が実施した授業を100点満点で数値化し、分析を行うことで、成果と課題が明確になるようにした。	学級経営指導、具体的場面における生徒指導、行事指導、昼食指導、清掃指導など、教科教育指導のみに偏ってしまった
授業の際に生徒とのかかわりを重視した指導の充実と生徒の成果の見取り	コロナ禍を見越した所謂一般的な体育実技の指導方法
2年間の教育実習において、取組が進んだと考える外的要因について教えてください。 <b>「機会 (Opportunity)」</b>	2年間の教育実習において、やりにくさを感じた外的要因について教えてください。 <b>「脅威 (Threat)」</b>
特になし。	外種目の体育でも、体育科でない教員からマスク着用について指摘を受けることが多々あった。
実習生とのビデオ会議システムやメールなどを活用した実習指導。	感染予防対策としてマスクをつけての実習。生徒と実習生のかかわりにやりづらさを感じた。
教育実習担当が扱うデータやメール等をすべて整理し、丁寧な引継ぎが行える体制を整えた。本校で実施される教育実習を整理し、要項を作成した。その要項を用いて、学校全体で実習の概要を共有する日を設定した。実習生が一同に会する事前説明会において、教育実習に必要な全資料と、最終日までの全日程を伝達することとした。これにより、実習期間中は、マネジメント面で混乱することは無く、教職員には教科指導に力を注いだだけ体制を整えた。	控室での会話制限、清掃活動への参加制限、生徒との会話制限、縦割り活動や行事への参加制限、校内の感染症対策方針と大学側の要望との不一致、大学側からの要望に対する校内教員の不満、生徒との交流を制限されたことによる実習生の不満
ICTに関する環境整備により、活用した教育実践が行えるようになり、実習生にもその取組を活用させた。	まだ暑さの残る時期でのマスクをつけての指導と他教科との協調性

でも、「授業」に対する向き合い方が変わることがなく、一層授業づくりに励んでいたことである。その理由として、各附属間で連携し、ガイドラインを策定した上で、保健体育科の学びを止めないようにしたことで、「With コロナ」における学び方が一定水準保たれたからである。これは教育実習においても同様であり、オンラインを活用した情報交換会を活用し、その機会を確保した。また、ICTを活用した内容については「機会（Opportunity）」で多く取り上げられ、DEやRTについての経験が生かされているものと推察できる。

一方で、マイナス要素である「弱み（Weakness）」や「脅威（Threat）」では、マスク着用や生徒とのかかわりの減少など感染症対策を行う中での負の側面が表出しているものと考えられる。また他教科との関係性についても言及されている部分もある。特に保健体育科は、動きを伴う実技教科であるため、マスクの着用については熱中症対策として外すことも認められている（文部科学省，2020）が、他教科にはそういった特別な措置がないためこのような差異が生まれるものだと考えられる。

#### (4) カリキュラム・デザインから考察する本稿の成果と課題

最後に本稿の成果と課題について、カリキュラムを検討しながら論じたい。

本研究においては、ガイドライン策定の判

断基準として、並行して、附属学校においてのカリキュラムをデザインしていった。これまでの教育実践を「Before コロナ」、感染症対策を実施している期間を「With コロナ」、終息後の実践を「After コロナ」と位置付け、整理した。これにより、本稿で紹介した実践以外にも、各附属学校で取組が行われた。例えば、DEとしてのアルティメットを活用した球技ゴール型の授業であったり、RTの知見を活かしたICTを活用した保健授業を創出したりするなど、教材開発という視点からは大きな成果を得ることができた。

しかし、COVID-19の感染拡大の現状は、複数の大きな波が繰り返され、終息ではなく、収束への対応に追われることとなる。さらには変異株の影響により、数か月前までの取組とは違った対応を取らざるを得ないこともあり、ガイドライン策定時のカリキュラムでは対応できないといった課題も表出した。

これらに対応する方法として、カリキュラム・マネジメントを柔軟に実施することのできるカリキュラムを掲げたい。カリキュラムについては、評価・改善をマネジメントとして組み込んだ、PDCA サイクルが重要であるとされている（天笠，2017）。今回は、DEやRTの実践を行いながら、修正版カリキュラムを策定した（図6）。しかし、これもここで終わりではなく、例えば収束から終息へと向かった際には、さらにカリキュラムの改善が求めら

With&Afterコロナ カリキュラム・マトリクス

		With コロナ&Afterコロナ		
		感染状況の段階		リスク マネジメント
Content & Action	ICTレベル	クリエイティブ・シーン (登校可能な状態)	キーピング・シーン (休校等の登校できない状態)	
		対面授業の中でICTを有効活用した新しい学びの創出	オンライン教材を活用した学びの継続 (オンデマンド方式)	
心身の発達と心の健康		自粛期間を経て、心と体がバランスよく成長することが望ましい、といった実体験を伴いながら学ぶ教材の開発	知識獲得型のオンライン教材 LV1 (移行初期) 教える内容を厳選し、家庭でも学べるオンライン教材。	通常の授業における配慮・リスクマネジメント 換気・消毒 間隔を広く 流行時にはオンラインの活用
体の発達・発達 性教育 心の発達	ICTのレベルを下記のように定め、右側の表では表記を Lv2,Lv1,Lv0とする。	自粛期間中、運動の減少、会話の減少などにより、鬱になる危険性が高くなる。そのような背景を踏まえ、今の時期に私たちが取り組まなければならないことを発達の過程を踏まえて学ぶ。 性教育についてはこの時期に基礎的な知識を学び、応用編として2・3年生で新たに学ぶ。新たに学ぶ内容としては、コロナ禍において、望まない低年齢の妊娠が増加したという事案を受け、避妊や性行為の及ぼす影響等について学習する機会を設ける。	教科書を読む指示を出し、それに応じた穴抜き問題等による確認。 動画は必要なく、ペーパーレベルでの対応。 (中期) オンライン学習による成果と課題の分析による、授業改善の実施。 普段の保健授業もこういった状況になっていないだろうか。真に子どもたちにとって役に立つ保健授業とは何なのか。考えるきっかけとする。 (成立期) 成果と課題を明らかにしたうえで、それぞれの地域の特徴や実態を加味した独自のオンライン学習スタイルを成立させる。今後、エンデミックへと感染症が移行するに伴い、このような視点は必要不可欠。	
健康と環境 環境 衛生		環境保全、公衆衛生の必要性に迫る授業 新型コロナウイルスは、環境が劣悪だから発生したのか。ネットに上がる、不確かな情報から、改めて、環境保全、公衆衛生の必要性に迫る授業		
傷害の防止		STAYHOME期間に交通事故が減少。一方で、死亡事故は増加。また、新型コロナウイルスを用いた新たな犯罪の発生など、今だからこそ教材化できる内容を生かして、子どもたちに生きて働く知識を養う		
傷害の防止 交通事故の防止		自粛期間中の交通事故の数的な関係から、交通事故の危険性について学ぶ。 コロナウイルス感染症を惹いた業務妨害 給付金を惹いた詐		新しい授業形態の 確立 ・教室で座学は非

図6 社会の変化に柔軟に対応するために修正したカリキュラム



れよう。加えて、保健体育科の教科の特性も加味したカリキュラムであることも肝要である。

これからの保健体育科が担う役割としては、異なった他者同士が関り合いながら学ぶことを通して、共生社会の実現のための手段として保健体育科の内容が大いに利用されるようになることが期待されている(例えば、鈴木, 2016; 近藤, 2020)。この動きは、2021年の東京オリンピック・パラリンピックを契機に、一層加速していくものであろう。誰もが運動に関わることのできる授業とは、どのようなものなのかを吟味しながら、カリキュラムをデザインし、マネジメントすることが必要となるだろう。さらに、教員養成課程の一翼を担っている附属学校の教員としては、教師教育の在り方は、時代の変化を反映するもの(岩田, 2021)でもある。そのため、特に社会の潮流の変化には鋭敏でなければならない。そのため、今後も編成するカリキュラムの成果と課題を検証し続けることは、教師でもあり、教師教育者でもある附属学校教員には求められる資質でもあり、使命でもあるのではないかと考え、今後もカリキュラム開発とその検証に取り組みたい。

注1) ここでの「遠隔教育 (Distance Education; DE)」とは、身体的距離を確保した授業実践とし、「遠隔指導 (Remote Teaching; RT)」は直接対面しない指導方法と定義する。

注2) この言葉の定義については、新型コロナウイルス感染症が(少なくとも短期的には)撲滅困難であることを前提となっている。新たな戦略や生活様式のことを「With コロナ」(新語時事用語辞典, 2020; 庄子, 2020)と称し、現代社会で多く使われるようになってきた。教育におけるWithコロナの状態を、椎井(2020)は「新型コロナウイルス感染症が収束しておらず、必要に応じて臨時休校等が行われる段階」(p.88)と位置付けている。また、世界では「COVID-19」という呼び方が一般的であるが、日本では「コロナ」という言葉が先行し、一般的となった(草原ら, 2020)。日本では、「コロナ」に接頭語をつけて様々な状況を表している

が、研究着手時にまだ新型コロナウイルス感染症の影響が収束しているとは言えない状況であったため、椎井(2020)の考えに基づき「With コロナ」という文言を本文中では使用した。

#### 引用(参考)文献

- 1)天笠茂(2017)平成29年改訂中学校教育課程実践講座.ぎょうせい, 東京都
- 2)朝倉雅史(2020)With コロナ時代を体育教師はどう生き抜くか.体育科教育2020年8月号, 大修館書店: 28-31.
- 3)有山篤利・山堀貴彦・金山千広(2009)ユニバーサルホッケーの教材化に向けた工夫—触球感の向上による学習効果の変化—.聖泉論叢, 17号: 41-56.
- 4)リンダ・L・グリフィンら, 高橋健夫・岡出美則監訳(1999)ボール運動の指導プログラム—楽しい戦術学習の進め方.大修館書店, 東京都
- 5)岩田昌太郎(2020)体育の授業研究における教師教育者の役割.木原成一郎, 大後戸一樹, 久保研二, 村井潤, 加登本仁編著, 子どもの学びがみえてくる体育授業のすゝめ, 創文企画, 東京都.
- 6)岩田昌太郎(2021)第8章教師教育研究.日本体育科教育学会編, 体育科教育学研究ハンドブック, pp126-132. 大修館書店, 東京都.
- 7)岩田靖(2012)体育の教材を創る—運動の面白さに誘い込む授業づくりを求めて.大修館書店, 東京都: p.2, pp27-28.
- 8)岩田靖(2016)ボール運動の教材を創るゲームの魅力をクローズアップする授業づくりの探究.大修館書店, 東京都
- 9)川喜田二郎(1967)発想法.中央公論新社, 東京都
- 10)経済産業省(online)“新型コロナウイルス感染症による学校休業対策 #学びを止めない ” .[https://www.learning-innovation.go.jp/covid\\_19/?fbclid=IwAR3-FsXLqtJvCmkldMOt0KYf1CN42bewTltyuGFkJUzqHztI-MFEQL1Qqu80](https://www.learning-innovation.go.jp/covid_19/?fbclid=IwAR3-FsXLqtJvCmkldMOt0KYf1CN42bewTltyuGFkJUzqHztI-MFEQL1Qqu80) 2021年1月8日閲覧
- 11)近藤智靖(2020)保健体育科とはどのような教科か.日本教科教育学会編.教科とその本質—各教科は何を目指し, どのように構成するか—.教育出版, 東京都: pp.134-139.

- 12) 草原和博・吉田成章・広島大学教育ヴィジョン研究センター編著(2020)ポスト・コロナの学校教育. 溪水社, 広島県
- 13) 中山勝廣(1994)ユニホック(運動)と心拍数についての一考案. 工学院大学研究論叢, 第32号: 115-125.
- 14) 日本フロアボール連盟“ネオホッケーとは”(online)  
<https://www.floorball.jp/neohockey/about/>  
2021年1月8日閲覧
- 15) 松田恵示(2020)コロナ状況のもとでの体育の「学び」. 体育科教育2020年8月号, 大修館書店, 2020, 東京都: pp.16-19.
- 16) 文部科学省, 2017, 『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 保健体育編 体育編』, 東山書房
- 17) 文部科学省(2018)中学校指導要領(平成29年告示)解説 保健体育編. 東山書房, 京都府
- 18) 文部科学省(2020a)臨時休業中の学習の保障等について, 2文科初第154号 令和2年4月21日
- 19) 文部科学省(2020b)“今年度の体育における学習活動の取扱いについて(令和2年10月7日)”  
[https://www.mext.go.jp/content/20201007-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20201007-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf) 2021年12月28日閲覧
- 20) 文部科学省(2020c)“(リーフレット)GIGAスクール構想の実現に向けて”,  
[https://www.mext.go.jp/content/20200625-mxt\\_syoto01-000003278\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200625-mxt_syoto01-000003278_1.pdf) 2021年12月28日閲覧
- 21) 文部科学省(2021)“学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～(2021.11.22 Ver.7 ※2021.12.10 一部修正)”  
[https://www.mext.go.jp/content/20211210-mxt\\_kouhou01-000004520\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20211210-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf) 2021年12月28日閲覧
- 22) 森勇示(2019)「越境的学習としての体育—附属学校での挑戦的実践—」愛知教育大学研究報告. 芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編(68), 51-59, 愛知教育大学
- 23) 岡出美則(2020)2020小学校体育改革のキモ, 体育科教育2020年3月号, 大修館書店: 16-19.
- 24) 大西一成(online)“「ディスタンス」と「ディスタンシング」, 意味は違う?”, 朝日新聞デジタル. 2020年6月24日.  
<https://www.asahi.com/articles/ASN6L7WZTN66UHB1035.html>, 2021年1月8日閲覧
- 25) 朴永晔(2018)メガスポーツイベントの開催誘致マネジメントに関する研究—2018平昌冬季オリンピックのSWOT分析を中心に—, 大阪経済法科大学論集, 112号, pp19-36.
- 26) S・B メリアム(2004)質的調査法入門教育における調査法とケース・スタディ. ミネルヴァ書房, 京都府: p.90.
- 27) 椎井慎太郎(2020)With コロナ時代の教育活動のポイント. 庄子寛之編著, With コロナ時代の授業のあり方. 明治図書, 東京都: pp.88-89.
- 28) 新語時事用語辞典 HP(online)2020年6月30日更新  
<https://www.weblio.jp/content/%E3%82%A6%E3%82%A3%E3%82%BA%E3%82%B3%E3%83%AD%E3%83%8A#> 2020年1月8日閲覧
- 29) 住本純・岡出美則・近藤智靖(2020)現職教員の成長に関する研究動向の分析—1997年～2018年を対象に—, 日本体育大学大学院教育学研究科紀要, 第3巻第2号 2020, pp.345-360.
- 30) 鈴木直樹・梅澤秋久・宮本乙女編著(2016)学び手の視点から創る 中学校・高等学校の保健体育授業. 創文企画, 2016, 東京都
- 31) 鈴木理・檜山康(1996)ニュースポーツの教材価値—ユニホックにおける学習内容の検討を通して—. 工学院大学共通課程研究論叢, 第34号: 213-222.
- 32) 高橋健夫(2003)体育授業を観察評価する. 明和出版, 東京都
- 33) 梅澤秋久・露木隆夫・坂本光平(2021)コロナ禍におけるソーシャル・ディスタンシングゲーム: 多様な学習者同士の協働的ネット型ボール. 運動実践教育デザイン研究, 第12号: 19-28.